

お茶の水女子大学人文科学紀要53:291-304

- 6) 新矢博美 中井誠一 芳田哲也 (2001) : 女子大学生の身体活動量と体構成および筋力の14年間における変化. 京都体育学研究17:19-24
- 7) 竹之内隆志 山本裕二 中島豊雄 (1995) : 大学生の健康と運動に対する認知-選択制体育実技の参加者を中心として-. Nagoya Journal of Health, Physical Fitness, Sports Vol.18, No.1, pp109-120
- 8) 井上直子ほか (1995) : 専攻別にみた女子大学生の健康に対する意識と行動について. 体力研究. No.89:32-39
- 9) 厚生労働省ホームページ:平成8年「保健福祉動向調査」. <http://www.dbtk.mhlw.go.jp>
- 10) 安田忠典 瀧英世 三神憲一 三宅真理 (2001) 大学生の休暇中における生活実態調査-運動習慣の有無を中心として-. 日本体育学会第52回大会体育社会学専門分科会発表論文集: 1-4

相撲初心者の決まり手に関する研究

— 少年相撲大会における相撲競技初心者の決まり手の分析 —

小田慶喜¹⁾
三浦敏弘²⁾

Research on a beginner's winning technique of sumo wrestling

Analysis of a sumo wrestling game on beginner's winning technique

in a boy sumo wrestling competition

Yoshinobu ODA, Toshihiro Miura

Abstract

The purpose of this study was to analyze the winning techniques in a beginner's sumo wrestling game. All matches of sixth grader's tournament were recorded with the video camera, and the winning technique in all matches was analyzed. The target matches are a total of 76 tournament matches from the first game to the final with 77 participants.

In the rate of an appearance of the winning technique in all matches analysis, the most winning technique was 22.4% of Yoritaoshi (frontal crush out, in this technique the opponent is driven backwards and literally collapses under the force of the attack. The attacker here too must maintain some grip on his opponent's loincloth). Second winning technique was 19.7% of Yorikiri (frontal force out, the two combatants will have come to grips and the attacker will drive his opponent backwards and out of the ring, maintaining a grip on that opponent's loincloth at all times). And the third winning technique was 17.1% of Oshidashi (frontal push out, the attacker pushes his opponent out of the ring without gripping the loincloth).

1) 姫路獨協大学
〒670-8524 姫路市上大野7-2-1
Himeji Dokkyo University 7-2-1
Kamionno Himeji Hyogo

2) 関西大学
〒654-0073 大阪府吹田市山手町3-3-35
Kansai University 3-3-35 Yamate Suita
Osaka 564-0073

Three kinds of winning techniques were admitted about 60% in total.

Tsukiotoshi (thrust down, the attacker will drive his opponent down into the clay with a thrusting motion after placing his open hand on the opponent's upper rib cage or at his shoulder.) was admitted 7.9%. Uwatenage (arm throw with an outside grip), Shitatenage (arm throw with an inside grip) and Hikiotoshi (pulling down) were admitted 3.9%. Oshidashi (frontal push down), Sukuinage (beltless arm throw) and Koshikudake (inadvertent collapse) were admitted 2.6%. Kotenage (forearm throw), Nichonage (body drop throw), Kirikaeshi (twisting backward knee trip), Utchari (backward pivot throw) and Ashitori (leg pick) were admitted 1.3%. Most common winning techniques in sumo are based on Tsuki and Oshi (pushing and thrusting).

This result showed the almost same tendency as Thouo's amateur sumo wrestling championship data. Moreover, even if compared with the result of a professional sumo game, the same result was shown in a beginner's sumo wrestling game.

I. 緒言

相撲の歴史は、古事記の中の「出雲の国譲り」という神話にまでさかのぼるとされている¹⁾。国津神系の大国主命が治める出雲国を、高天原系すなわち天照大神系の建御雷神が求めたのに対し、大国主命の子である建御名方神が力比べで勝利すれば国を譲ることを提案する。稲佐の小浜で建御雷神と建御名方神の両者が相撲を取り、建御雷神が勝利して出雲は平和裡に高天原系へ譲られたとされている。あくまでも神話としての相撲の記述であるが、力比べによって国譲りという大問題を平和的解決を試みたように解釈されているが、歴史的事実ではないことは明白である。古代の領地争いにおいても、戦闘における個人戦と同様に、組み打ちとなって相手の命を奪う方法が取られたであろうことを考えると、領地争いの戦闘を相撲という形で後世に伝えたと理解することもできる。この領地争いに関する表記は、神から人間へと表現方法を変えて日本書紀に「野見宿禰と当麻蹶

速の力比べ」として表記されている。第十一代垂仁天皇の御前で、大和国で最強といわれた当麻蹶速と出雲国の野見宿禰が相撲を取り、野見宿禰が当麻蹶速を踏み殺し、領土を得たことになっている。この野見宿禰は現在、相撲の神様として奉られている。いずれも歴史的解釈による史実ではないことは明らかであるが、領地争いを表記したものと解釈することもできる。このように、相撲は人間の力と力の比較をあらゆる文化とも解釈することができ、単に闘争における相手を倒す実践方法の訓練だけでなく、神事としての原点も有している。神を迎える、霊の崇りを鎮める、疫病や災害を回避する、豊饒を祈念するなどの神事として相撲という様式があつかわれている²⁾。

武器を持たず、素手で相手と組み合う力比べの文化は、人間のコミュニケーションにも社会性の形成にも重要な役割を果たす。伴³⁾の示すように、日本製の武器としての代表である日本刀は、抜かないことにその意味を持っており、安全管理の象徴である立場を理解することが重要である。武家社会において日本刀を所有するという生活は、日本刀の本性である「待ちの姿勢」であり、身構えと心構えを総合した生活体系を実践する生活姿勢を誇示することにつながると解釈できる。日本人の心性の背景には、農耕作業により醸成された生活姿勢があることを理解させられる。これに反して、ヨーロッパを中心とした西洋の心性の典拠は、狩猟民族であることを基盤とする生活道具としての銃の文化にあり、後戻りのきかない切り込み型の文化様式と考えることができる。この点に関しては、日本における武器所有の自衛論と欧米における軍事抑止力のずれを感じるころである。いずれにしても、直接触れあって相手の力を理解する行為そのものが、日本人の生活様式の中から消失しつつある。農耕文化から狩猟文化への変化ではなく、からだの教育を軽視しつつある体育教育への取り組みの甘さが原因と考えることができる。

平成8年の中央教育審議会第一次答申において、これからの学校教育の在り方として、「ゆとり」の中で自ら学び自ら考える力などの「生きる力」

の育成を基本とし、教育内容の厳選と基礎・基本の徹底を図ること、一人一人の個性を生かすための教育を推進すること、豊かな人間性とたくましい体をはぐくむための教育を改善すること、横断的・総合的な指導を推進するため「総合的な学習の時間」を設けること、完全学校集5日制を導入することなどが提言された。教育課程審議会は、教育課程の基準の改善の諮問を受け、平成10年答申するにいたった⁴⁾。この答申においては、幼児児童生徒の実態、教育課程実施の状況、社会の変化などを踏まえつつ、完全学校週5日制の下、「ゆとり」の中で「特色ある教育」を展開し、幼児児童生徒に「生きる力」を育成することを基本的なねらいとした改訂が提言されている。特に中学校学習指導要領解説の保健体育編⁵⁾においては、中学校保健体育科改訂の趣旨の中で、武道について「わが国固有の文化に触れるための学習が引き続き行われるようにする。」と表現してある。さらに各分野の目標および内容の中で、武道については、「武技、武術から発生したわが国固有の文化として伝統的な行動の仕方が重視される運動で、相手の動きに対応した攻防ができるようにすることをねらいとし、自己の能力に適した課題の解決に取り組んだり、勝敗を競い合ったりする運動である。また、礼儀作法を尊重して練習や試合ができることを重視する運動である。」とし、技能の内容として、柔道、剣道、相撲を取り上げている。その態度の内容の中においては、「自分で自分を律する克己の心を養うとともに、相手を尊重する態度で練習や試合ができるようにする。礼儀作法は、単に形のまねに終わるのでなく、克己の結果としての心を表すものとして、また、相手を尊重する方法としてこれを行うようにする。勝敗に対して公正な態度がとれるようにする。」としている。このように武道は、領域として中学校で初めて示される内容であるが、日本固有の文化に触れるための学習と考えることができる。一方、小学校の学習指導要領解説の保健体育編においても、第3学年・第4学年の目標および内容として、基本の運動の中に、力試しの運動遊びとしての、押し出し遊びなどのすもう遊びや引き合い遊びを例示し、人や物を手や体で押ししたりひいたりして力試しをする運動の内

容が示されている⁶⁾。

体育における日本固有の文化の学習とは何かを理解する必要がある。国際人としての日本人教育に関しても、かかわりを持つ重要な養育内容である。広辞苑⁷⁾には「国技：その国特有の技芸。一国の代表的な競技。日本の相撲など」と解説してある。また、新辞林⁸⁾にも「国技：その国の代表的な武術・技芸・スポーツ。日本の相撲など」と説明してある。これらから判断すれば、日本の固有の文化である国技は相撲ということになる。しかし、相撲に関しては学校教育の中で取り上げられることは少なく、日本人の相撲に関する知識の供給源は、テレビで年6回中継される大相撲が中心になっているようである。しかし、興行としての大相撲は、教育として取り上げられる武道の一環としての相撲とは分けて考える必要がある。特に、教育としての相撲を理解するためには、実際に行われる相撲を分析し、その実態を把握することが重要である。本研究においては、小学校の第3学年・第4学年の目標および内容として取り上げられた、基本の運動の中の力試しの運動遊びとしての、押し出し遊びなどのすもう遊びや引き合い遊びを一步進めたかたちで実施された小学生初心者の相撲の試合の分析を行い、相撲を取ることによって何が引き出され、国技として表現される相撲に何を求めれば良いのかの指標とすべく、教育としての相撲の分析を試みた。

II. 方法

2000年5月に実施された『わんぱく相撲明石大会』における6年生の取り組みを対象とした。6年生によって実施される全取り組みをビデオカメラにより撮影し、すべての取り組みにおける決まり手の分析を実施した。対象とした6年生の取り組みは、参加者77名を対象とした、1回戦、2回戦、3回戦、4回戦、準々決勝、準決勝、決勝の合計76試合である。相撲の経験者の指導を受けた小学生による取り組みではなく、基本の運動の中の力試しの運動遊びとしての、押し出し遊びなどのすもう遊びや引き合い

遊びを一步進めたかたちで参加した小学生の取り組みを対象として分析を試みた。

【わんぱく相撲明石大会】は明石地区における小学生を対象とした相撲の大会であり、4年生、5年生、6年生を学年別で取り組みをする方法をとる。【わんぱく相撲明石大会】は全国大会への予選会となっており、兵庫県下を神戸、明石、西脇、淡路、伊丹、龍野、三田、美方の8地区に分けて大会が実施される。各地区の優勝者は、6月に実施される兵庫ブロック大会である県大会への出場権を得ることができる。県大会としての兵庫ブロック大会では、神戸、明石、西脇、淡路、伊丹、龍野、三田、美方の8地区の代表によるリーグ戦が行われ、各学年の4位までが全国大会への出場権を得ることができる。全国大会は、7月に東京の国技館で開催され、北海道から沖縄までの地区大会参加者約60,000人の中から勝ち抜いた各学年158名の3学年合計474名が、国技館での全国大会を体験できる。

大相撲の力士の出身地に偏りがあるように、少年に対して相撲の指導が積極的になされている地域と、ほとんど取り組まれていない地域とが存在している。本研究において対象とした明石地区は、相撲に対しては消極的な地域である。その根拠として、相撲の大会を開催する施設である土俵を所有しておらず、対象大会は明石中央体育館において、マットの上に、ゴムで土俵の円が作られているシートをかぶせた簡易土俵を用いての取り組みであった。まわしも着ける必要がなく、相撲パンツといわれる簡易のまわし様のものを着けて取り組みを行う方法が取られた。相撲の取り組み内容に関しても、参加者は初心者が多く、経験がある者も4年生および5年生で同大会に参加しただけのことであり、専門的な指導を受けていない初心者の相撲が調査対象と考えることができる。

Ⅲ. 結果

表1に示すように、1回戦においては13組の取組みが実施された。決まり手としては押し出しが4取組みで、突き落とし、突き出し、寄り倒し、

下手投げ、小手投げ、引き落としが1取組みずつであった。技によらない決まり手としての非技である腰くだけが1取組み認められた。2回戦においては32組の取組みが実施された。決まり手として、寄り倒しが7取組み、寄り切りと押し出しが6取組み、突き落としが4取組みとなり、突き出し、上手投げ、すくい投げ、うっちゃり、切り返し、二丁投げ、引き落とし、足とりが1取組みずつ認められた。3回戦においては16組の取組みが実施され、寄り倒しが5取組み、寄り切りと押し出しがそれぞれ3取組み、押し倒しと下手投げが2取組み、腰くだけが1取組み認められた。4回戦は8組の取組みが実施され、寄り切りが4取組み、寄り倒しが2取組み、上手投げとすくい投げがそれぞれ1取組み認められた。続いて実施された準々決勝の4組の取組みは、寄り切りが2取組み、突き落としと上手投げがそれぞれ1取組み認められた。準決勝の2組の取組みは、寄り倒しと引き落としが決まり手となった。優勝決定戦である決勝における決まり手は寄り倒しであった。

表1. わんぱく相撲明石場所における決まり手

1回戦	2回戦	3回戦	4回戦	準々決勝	準決勝	決勝
13試合	32試合	16試合	8試合	4試合	2試合	1試合
押し出し 4	寄り倒し 7	寄り倒し 5	寄り切り 4	寄り切り 2	寄り倒し 1	寄り倒し 1
突き落とし 1	寄り切り 6	寄り切り 3	寄り倒し 2	突き落とし 1	引き落とし 1	
突き出し 1	押し出し 6	押し出し 3	上手投げ 1	上手投げ 1		
寄り倒し 1	突き落とし 4	押し倒し 2	すくい投げ 1			
下手投げ 1	突き出し 1	下手投げ 2				
小手投げ 1	上手投げ 1	腰くだけ 1				
引き落とし 1	すくい投げ 1					
腰くだけ 1	うっちゃり 1					
不戦勝 2	切り返し 1					
	二丁投げ 1					
	引き落とし 1					
	足とり 1					
	不戦勝 1					

図1は全取り組みにおける決まり手の出現率を示したものである。最も多い決まり手は、寄り倒しの22.4%であり、寄り切りの19.7%、押し出しの17.1%が続き、この3種類の決まり手で60%をしめていることが認められた。続いて突き落としが7.9%、上手投げ、下手投げ、引き落としが3.9%、

押し倒し, 突き出し, すくい投げ, 腰だけが2.6%, 小手投げ, 二丁投げ, 切り返し, うっちゃり, 足とりが1.3%であった. 図に示すように, 基本の攻め技としての力を入れて前に押す決まり手が多く認められた.

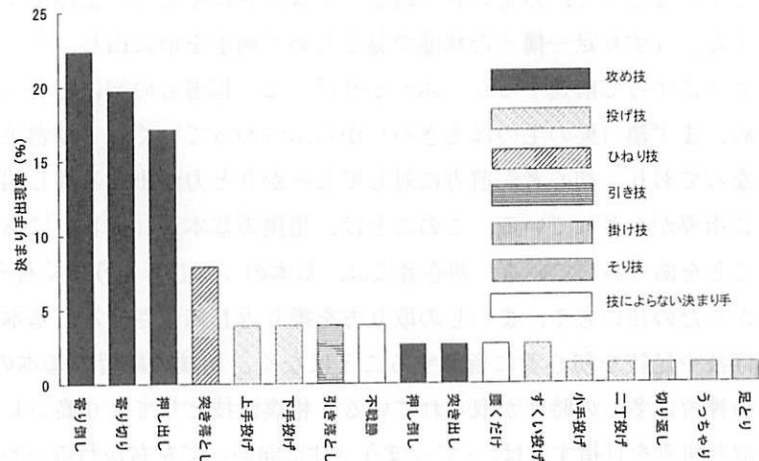


図1. わんぱく相撲証場所における決まり手の出現率

IV. 考察

兵庫県下で相撲が実施できる環境を備えている施設は少ない, 日本固有の伝統文化を教育としてあつかう科目としての取り組みを試みている教育機関も少ないのが実情である. このように大学, 高等学校, 中学校において相撲を盛んに実施している状況は少なくなっている. 今回対象とした兵庫県の明石地域は, 相撲の施設としての土俵を所有しない地域である. 過去において全くそのような伝統文化を保持していなかったのかの調査に対しては, 以前は施設があったが, 利用されないために他の施設への転用が行われているというのが実態である. 周辺の高砂地区や淡路島地区には, スポーツ施設の中に相撲用の土俵を保有している地域もあり, 積極的に相撲を実施する環境をト整えているところもある.

小学生を対象とした相撲の大会を開催している青年会議所は, 青少年の健全育成を目的として, 全国的規模で連絡を取りながら運営をしており,

その取り組みは評価される. 「わんぱく相撲大会」開催の趣旨は, 「国技である相撲を通して, 礼の精神と, 勝つことの喜び, 負けることの悔しさを体験することにより, 勝者を称え, 敗者への思いやりを育む」であり, 参加選手に国技館において相撲をとることや日本一をかけて戦う夢を与えるとして行事が組まれている. 同時に身体運動を通して参加・協力を申し出る地域市民とのつながりにより, 地域の教育力の向上をはかり, 市民が中心となった青少年の「生きる力」を育む環境作りを推進する事業として評価されている.

全国大会規模での競技はもちろんのこと, 全国大会の中では相撲部屋宿泊体験やスポーツ教室 (著名スポーツ選手等による講演) が実施されている. また都道府県毎のブロック大会のサポートや審判講習会 (審判者の育成) も行われ, 国技としての相撲の伝統文化の普及に努力がなされている.

「わんぱく相撲」の歴史は1976年に社団法人東京青年会議所が実施した「東京23区の魅力度・第2回都民生活意識調査報告書」に基づいて, 遊び場の少ない東京の子供達にスポーツの機会をより多く与え, 心身の鍛練と健康の増進を目的として, 身近に行えるスポーツである相撲をとりあげ, 1977年に社団法人東京青年会議所が, 23区全域に運動として展開したことに始まる. さらに1981年に社団法人東京青年会議所が, 財団法人日本相撲協会と協力して, 「わんぱく相撲の手引き」を作成のうえ, 全国の市町村教育委員会並びに各地の青年会議所に無料配布し, 全国への普及運動が展開された経緯を持っている. 国技館が蔵前から両国に移転する際に, 「わんぱく相撲全国大会」を開催する方向付けがなされ, 1985年8月4日に第9回「わんぱく相撲東京場所」と併催で, 「わんぱく相撲全国大会・新国技館落成記念大会」が開催され, 継続が試みられている.

このように, 相撲を中心とした伝統文化を育てる取り組みは, 東京を中心に実施されているのが実情である. 国技館を有する環境をうまく活かし, 学校だけに頼らない地域で取り組む社会教育の展開は, 今後の児童・生徒を中心としたからだを通じての教育の在り方に一つの方向性を示すもので

あると考えられる。

本研究で対象とした大会に参加した小学生は、土俵で相撲を取った経験はほとんど無い者ばかりである。参加するためには、明石青年会議所から各小学校に連絡が入り、学校からの参加許可を得て参加しているため、各学校は相撲に関する認識は持っているようである。しかし、事前に大会のための準備をしている状況は認められず、初心者の相撲の取り組みを分析できる良い機会となった。

相撲の決まり手については、大相撲の決まり手が参考になっている。1960年に70手（勝負結果としての勇み足、腰砕けの2手を含む）になって以来、40年ぶりに決まり手の検討がおこなわれ、2001年1月7日初場所の初日から、相撲の決まり手は87手に増加された。その内容は、以前採用されていた決まり手が復活したものとして、小づま取り、伝え反り、大逆手、徳利投げ、小手ひねり、素首落とし。新しく設定されたものとして、送りつり出し、送りつり落とし、送り投げ、送り掛け、送り引き落とし、後ろもたれ。さらに、勝負結果として、つき手、つきひざ、踏み出しのが加えられている⁹⁾。

相撲の決り手については、多くの技があり既にどのような形か分からなくなっているものも含めて400以上あるともされている。データベースとして346種類の技をまとめているホームページも認められる¹⁰⁾。

塔尾らは、相撲における決まり技を中心に体系化を試み、中学生より全日本までの各選手権大会の決まり技を分析して、試行頻度の高い「前に攻めるわざ」は60%以上を占めることを示し、その中でも、寄りきり、寄り倒し、押し出しの決まり技が他の技に比較して非常に高い頻度であられる傾向を指摘している^{11) 12)}。塔尾らの研究は、競技として鍛練された相撲競技の選手の取り組み分析であるが、寄りきり、寄り倒し、押し出しの決まり手の出現率は、初心者の取り組みにおいても同様の結果を導き出すことができる。

兵庫県神戸市長田区で、地域ボランティアで実施されている平成相撲道

場で実施されている練習内容は、「準備運動—伸脚や、屈伸運動など」、「蹲踞（そんきょ）—つま先だちで、ひざを開いて深く腰をおろし、上体をまっすぐにする」、「四股（しこ）をふむ—両足を開いて構え、足を左右かわるがわる上げて、力をいれて踏む。手はひざにそえて、上体をまっすぐにする」、「すり足—構えた状態で脇をしめて両手を前に出し、足を上げないようにすって前進する」、「ぶつかりげいこ—指導者の胸にむかって脇をしめ、まず額（髪の毛のはえぎわ）からぶつかっていく」、「練習試合」からなっており、初心者が前方に対してしっかりと力が出せる押し相撲を中心に指導がなされている。このことは、相撲の基本が「押し」にあるということを示している。初心者には、基本の「押し」をうまく行うための、からだの使い方や、まわしの取り方を繰り返し練習させる。基本的には投げ技や足技を初心者に指導することはなく、相撲の練習の基本の「押し」の練習に多くの時間が取られている。相撲競技としてより高いレベルでの取り組みを目指す者は、「てっぽう（柱に向かって左右かわるがわる突っ張る）」、「ころがり（相撲の技に対する受け身のことで、頭、肩、手のひらなどをつかないようなころび方をする）」、「股割り（ケガをしないように、柔軟性を養う）」などの、本来の相撲の稽古が導入される方法を取っている。浅見ら¹³⁾も初心者のトレーニングとして重要な部分は、運び足（出足、すり足）であることを指摘している。蹲踞の姿勢から仕切り姿勢、そして立ち上がり、中腰の姿勢で運び足を使って相手を攻めるための重心の安定した体勢は、基本練習として重要である。さらに相撲では、「押せば押せ、引かば押せ」が鉄則であることをあげ、押しが相撲の基本であることも認めている。

表2は、平成13年・夏場所の中入り後本割り取組に使われた決まり手の出現順位（取組総数293、一日の決まり手数平均10.7）を示したものである。大相撲の力士たちの決まり手の多くが、攻め技である押し相撲を基本にした「寄り切り」と「押し出し」で勝負をすることが多く、押し合いに負けた力士が相手の力を利用してかける技である「引き落とし」、「はたき込み」

表2. 平成13年・夏場所中入り後本割り取組に使われた決め手の出現順位
(取組総数293, 一日の決め手手数平均10.7)

決め手頻度順位	決め手	頻度	決め手出現率(%)
1	寄り切り	64	21.8
2	押し出し	59	20.1
3	引き落とし	22	7.5
4	はたき込み	18	6.1
5	上手投げ	16	5.5
6	押し倒し	15	5.1
7	下手投げ	14	4.8
8	つき落とし	12	4.1
9	寄り倒し	9	3.1
10	送り出し	8	2.7
10	つき出し	8	2.7
12	上手出し投げ	7	2.4
13	突き倒し	5	1.7
14	小手投げ	4	1.4
14	すくい投げ	4	1.4
16	極め出し	3	1.0
16	下手出し投げ	3	1.0
18	うっちゃり	2	0.7
18	切り返し	2	0.7
18	首投げ	2	0.7
18	小股すくい	2	0.7
18	巻き落とし	2	0.7
18	渡し込み	2	0.7
24	綱打ち	1	0.3
24	内無双	1	0.3
24	上手ひねり	1	0.3
24	送り倒し	1	0.3
24	肩すかし	1	0.3
24	さば折り	1	0.3
24	すそ取り	1	0.3
24	外掛け	1	0.3
24	吊り出し	1	0.3
24	ひっかけ	1	0.3

で勝敗を決めている状況が認められる。投げ技でよく知られている「上手投げ」や「下手投げ」、「小手投げ」などは、「寄り切り」と「押し出し」に比較すると極めて少ないことが理解できる。相撲の初心者である小学生が参加する【わんぱく相撲明石場所】の結果でも、基本である押しを中心とした決め手が多いことは、相撲の特質をあらわしているものと考えられる。明石大会では、「寄り倒し」が決まり手の中で一番多いことから、相撲

の基本としての「腰を低くする姿勢」ができていないため、土俵ぎわに追い込んで腰を低くして寄り切ることができず、からだをあずけて倒れ込む相撲になっているためである。土俵のように傾斜のついていない場所での倒れ込みは、相手の体重を全部受けることになり、生涯予防の点から今後の対策が必要である。

相撲の基本的な動き、稽古、決め手などは、興行として実施される大相撲の基本と同じものであると考えることができる。しかし、アマチュア相撲の交際化や発展、学校教育における体育としての相撲を考えた場合、大相撲の伝統に寄り掛かるのではないスポーツとしてのアマチュア相撲をどのように考えるかは今後の大きな問題となるところである¹⁴⁾。

国技としての伝統をどのように守るのかに関しては、学校教育における体育として取り上げる以上は明確にする必要がある。山田¹⁵⁾の指摘するように、民俗学的にみた相撲は、必ずしも商業主義をベースとした興行的力比ではない。伝統を紐解けばかならず、宗教的な呪術や儀礼との関係が本質として現れ、相撲のルーツすらも内陸アジアから中国・朝鮮半島を経て、古代の日本にもたらされたのではないかという問題も指摘されるであろう。興行としての大相撲が女性を土俵に上げない理由として、「伝統は守らねばならない。相撲は神事だ。女人禁制の社会が日本に一つぐらいあってもよいではないか。」の回答をしていることは事実であるが、学校教育における体育としてどのように説明するか、伝統や国技だけの説明では難しい点がある。

V. まとめ

少年相撲大会における相撲競技初心者を対象として、初心者の相撲における決め手の分析および検討を実施した。

2000年5月に実施された【わんぱく相撲明石大会】における6年生の取り組みを対象とした。6年生によって実施される全取り組みをビデオカメラにより撮影し、すべての取り組みにおける決め手の分析を実施した。

対象とした6年生の取り組みは、参加者77名を対象とした、1回戦、2回戦、3回戦、4回戦、準々決勝、準決勝、決勝の合計76試合である。

全取り組みにおける決まり手の出現率を検討すると、最も多い決まり手は、寄り倒しの22.4%であり、寄り切りの19.7%、押し出しの17.1%が続き、この3種類の決まり手で60%をしめていることが認められた。続いて突き落としが7.9%、上手投げ、下手投げ、引き落としが3.9%、押し倒し、突き出し、すくい投げ、腰くだけが2.6%、小手投げ、二丁投げ、切り返し、うっちゃり、足とりが1.3%であった。図に示すように、基本の攻め技としての力を入れて前に押す決まり手が多く認められた。

この結果は、塔尾らの相撲経験者の競技としての中学生より全日本までの各選手権大会の決まり技を分析した結果と、同様の傾向を示した。

また、大相撲の取り組み結果と比較しても、経験者と初心者取り組みにおいて、同様の結果を認めることができた。

【参考文献】

- 1) 竹内誠, 相撲はこうして発展してきた, 歴史街道7月特別増刊号, PHP研究所, 1992, 35-51.
- 2) 宮田論, 相撲の原点を追いかけて, 別冊宝島160号, JICC出版局, 1992, 258-271.
- 3) 伴義孝, 「生きる力」の再発見, 見洋書房, 1997, 187-263.
- 4) 文部科学省, 小学校学習指導要領解説体育編, 東山書房, 1999, 1-10.
- 5) 文部科学省, 中学校学習指導要領解説一保健体育編一, 東山書房, 1999, 55-62.
- 6) 文部科学省, 小学校学習指導要領解説体育編, 東山書房, 1999, 41-64.
- 7) 新村出, 広辞苑第5版, 岩波書店, 1998, 936.
- 8) 松村明他, ハイブリッド新辞林, 三省堂, 1998, 663.
- 9) 毎日新聞, 2000年12月5日, 朝刊, 19面.
- 10) <http://www.geocities.co.jp/Colosseum-Acropolis/6118/wazacol.htm>
- 11) 塔尾武夫ら, 格技における技術の体系化に関する研究—相撲における決まり技の順次性と体系化の修正—, 日本体育大学紀要, 17巻2号, 1988, 11-21.
- 12) 塔尾武夫ら, 相撲の技の体系化に関する研究—相撲のくずし技, 決まり技の分布の統計的検討—, 日本体育大学紀要, 23巻1号, 1993, 25-36.
- 13) 浅見俊雄ら, 現代体育・スポーツ体系代20巻, 講談社, 1984, 14-70.
- 14) 田中守ら, 武道を知る, 不昧堂出版, 2000, 74-83.
- 15) 山田知子, 相撲の民族史, 東京書籍出版, 1996, 231-233.